

にいたらず、其故は秋作の實のりも少づゝはありてとりもし、又御領主方より御救の米穀、および友救の雜穀等もありし故食餌のたえて、うゑ死にせしといふほどのものは、一人もなかりければ也、扱又奥州等の他國にては、うゑ死にせしが多くありけり、わけて大きゝんの所にては、食物の類とては一色もなかりければ、牛や馬の肉はいふに及ばず、犬猫までも喰ひ盡しけれども、つひに命をたもち得ずしてうゑ死にけり、其甚所にては家數の二三十もありし村々、或は竈の四五十もありし里々にて、人皆死に盡し、ひとりとして命をたもちしはなきもありけり、其なき跡を弔ふ者なれば、命の終りし日も知れず、死骸は埋ざれば鳥けだもの、餌食となれり、庭も門もくさむらと荒て、一村一里すべて亡所となりしもあり、かく成果て見る時は、これに過し悲はなし、然を其由を知らぬ人などは、何ほどのか、なんたりといふとも、までの事はあるまじきと思ふもあらんが、其疑をはらせんために、我慥に聞き届けしを示す事左のごとし。

右卯年き、んの後、上州新田郡の人高山彦九郎と云ひしあり、奥州一見の爲、彼國に至り、こゝやかしこと經めぐりあるきしが、ある山路へかゝりしに踏まよひて、行べきかたを失ひ、難義のあまり、高き峯によぢのぼりて、山のふもとを見渡しければ、山間に人家の屋根のがすかにあるを見つけしかば、心悦て、草木を押分けつゝ、やう／＼としてふもとに下りしに、其村里に人とて、はひとりもなしこはいかなる事にやと見まはせば、田畠の跡は茫々たるくさむらとなり、家々は皆たぶれかたぶき、軒端には葦などはひまとはれり、あやしと思ひながら空敷家に入りて見れば、篠竹など椽をつらぬき出たり、其間々に人の骨白々と亂れありしを見て、目も當られず大におどろき、いと物凄おぼえければ身の毛よだちて恐れをなし、とく／＼そこを走出、人住む里へと志し、路を尋けれども、あれはてたれば、其あたりには路がたちたえしゆへ、大に苦みしが、路らしきにたづねあたり、とやかくとして、人里に馳着、始て人心地となりけり、かくあれば奥の方